

復刊

いざみ



所沢図書館だより
復刊14号(通巻92号)
題字 高橋 玄洋 氏

目次

- P.1 「装丁」って、何？
- P.2-4 図書館文学講座
「現代女性作家論」
- P.5 出張おはなし会
- P.6 パスファインダーって
何ですか？

そうてい

「装丁」って、何？

桂川 潤

「装丁家(そうていいか)」と名乗っても、まず何の仕事か理解してもらえません。「そうてい」を辞書で引くと「書物を綴じて、表紙・扉・カバー・外箱などをつ

け、意匠を加えて本としての体裁を飾り整えること。また、その意匠。装本。」(大辞林)とあります。最近では「ブックデザイン」という呼びかたが一般的になりました。

「本づくり」には二つの面があります。ひとつはテキストを書いて編集する作業。言うまでもなくこれがいちばん大事な作業ですが、しかし、そのテキストも印刷・製本された「書物」とならなければ読者には届きません。二次元の「テキスト」を二次元の「書物」に「物質化」する作業が「造本・装丁」です。

どんなにテキストがすばらしくても、読者はそのテキストにいきなり接するわけではありません。読者がまず目にするのは、良くも悪くもテキストを包みこむ

装丁です。だから、この本はおもしろいよと装丁が誘ってくれないと、すぐれたテキストでも読んでももらえません。

現在の日本では、年間の新刊点数が八万点を超え、平均すると一日あたり二二〇冊もの本が出版されています。読者の手にとつてもらうには、いろいろと工夫が必要で、手は保護しつつ、人を惹きつけて手に取らせるといふ、両方の役割を果たしているのです。書籍が電子化され、テキストが物質的な制約から解放されたれば装丁など必要ありません。しかし「テキストのみ」情報のみ」の電子ブックは、はたして「本」なのでしょうか。皮肉にも電子ブックの登場が、「物である本」の魅力をクローズアップした面もあります。装丁は、単にテキストを包み保護するパッケージであるばかりでなく、テキストの持つ構造や世界観を表出し、読者の意識に深く刻みこまれます。ですから、装丁は

「本の顔」であると同時に「時代の顔」でもあるのですね。作家で哲学者のウンベルト・エーコは「スプーンや車輪が、古代から現代までいささかも変わらないように、本も、一度発明したらそれ以上うまく作りようがない完成品なのだ」と記しています。本を手にするとき、造本装丁にちよつと思いを馳せてみると、本の楽しさが広がりますよ。(つづく)



イラスト：桂川 潤

「本の顔」であると同時に「時代の顔」でもあるのですね。作家で哲学者のウンベルト・エーコは「スプーンや車輪が、古代から現代までいささかも変わらないように、本も、一度発明したらそれ以上うまく作りようがない完成品なのだ」と記しています。本を手にするとき、造本装丁にちよつと思いを馳せてみると、本の楽しさが広がりますよ。(つづく)

桂川 潤(かつらがわ・じゅん)

装丁家。所沢市在住。第四十四回造本装幀コンクールで受賞。手がけた装丁本は二千冊以上。

著書に『本は物である——装丁という仕事』(新曜社)、共著書に『本は、これから』(岩波新書)等

角田光代『草の巣』を中心に

講師 上坪裕介氏（日本大学芸術学部専任講師）
平成28年3月12日（土） 会場 所沢図書館本館

はじめに

私は所沢出身で、所沢に住んでいます。小説を書きたいと思っています。日本大学の芸術学部に入学しました。大学院では創作活動をしつつ、庄野潤三という作家を研究してきました。庄野潤三は一生をかけて、ある一つの場所にこだわり、場所づくりを実践しながら、作品と人とが共に成熟していった作家だと私は考えています。

そのような視点で、現代女性作家である角田光代さんについて話をしていきます。角田さんは有名でご存知の方が多いと思いますが、その中でも割と初期の「草の巣」は、現在の角田さんのイメージとは、ずいぶん印象が違うように思われるかもしれません。極端な言い方をするとなんとなくつきにくい作品です。

それを、どう読むと色々なものが見えてくるのか、こういう風に読んでみると面白いのではないかということをご提案させていただきますと思います。

角田光代さんについて

角田さんは一九六七年に神奈川県横浜に生まれました。作家としては円熟期を迎えつつある時期で、正にこの現代女性作家という意味ではトップランナーかと思えます。小学校一年生の頃に、熱心な国語の先生に作文等をよく見てもらい、書く楽しみを覚え、将来は作家として生きていくことを意識し始めました。一九八八年に「お子様ランチ・ロックソース」という作品でジュニア小説の賞である、コバルト・ノベル大賞を受賞されます。当時は、彩河杏という



ペンネームを使っており、この受賞後、約二年間にわたって七冊の本を刊行されます。ただ、元々純文学志向が強い方で、ジュニア小説は望んで書いていたのではなく、書き続けていたのとはなく、書き続けていれば自分が書きたいと思う作品が書けるようになると考えていたそうです。その後、一九九六年に『まどろむ夜のUFO』という作品で芥川賞、三島由紀夫賞に並び、第十八回野間文芸新人賞を受賞して、作家としての認知を受けます。

角田さんは引越好きというところで有名です。自分でお金を貯めて、二十一歳で実家を出ています。窮屈な想いを抱えていたそうで、母親が泣いて止めるのを聞かずに引越し、それからおよそ十年で六回も引越しをされたそうです。他にも二十五歳の時に一か月にわたり、

タイ、マレーシアを巡る旅をさせたことで旅行好きになったそうです。また、自宅のすぐ傍に、必ず仕事部屋を借りて、そこへ朝九時に通い、夕方の五時まで仕事をされます。作家としては、ちよつと変わった生活をされているそうです。

角田さんの性質は実は作品にも表れていて、角田光代作品を全体で見た場合に、「家」「家族」「場所」「移動」「逃避」「旅」という六つのキーワードが挙げられます。これらのキーワードのほとんどは、この「草の巣」の中に集約されています。

「草の巣」とは

「草の巣」は主人公の「私」が、ガラクタを集めて山の中に家を作っている村田という男の車に乗って移動を続ける話です。よく分からないですよ（笑）。もう少しこの話をかみ砕いていきます。女性である「私」には同棲している中野という男がいます。家賃は折半で、中野は家で仕事を、「私」は家の近くの飲み屋でアルバイトとして働い

異界往来譚

ています。その飲み屋のお客である、村田という口数の少ない男に、様々な経緯から山の中の家を見に来ないかと誘われ、同棲している中野から逃げるような形で村田の車に乗り、その土地を離れます。そこで、車に乗って家を見に行くのですが、山の中の家は脚の欠けた卓袱台や壊れたテレビ等のガラクタを、なんとなく並べてある変な家でした。村田は文房具の営業の仕事をしているのですが、その合間に廃屋等に足を運んでガラクタを集めており、「私」は変な人と思いつつも、そのまま一緒に居続けます。主人公は元の場所に帰らない理由として、飲み屋のお金を盗んできたことを挙げますが、本当はそんなこととはしていません。でも男はその話を信じ、そんな彼女を気にかけて車を貸してくれます。「私」はなぜか家に帰らないという生活を何日も続けていきます。昼は文房具の営業車に乗って、夜は車を借りて安いビジネスホテル等に独りで宿泊するという流れになり、ただ車に乗って移動し続けている、そんなお話です。

私が「草の巢」を読んだ時に、イメージとして挙がったのがメリーゴーランドでした。何処かに行ける気分にはさせてくれる木馬に乗っているのですが、実は同じ場所をぐるぐる回っているだけで、何処にも行けない。馬の装飾を剥いたら非常に無機質な鉄の塊が露出し、いくつもの部品が繋がって動いているだけ……。そのようなイメージです。ここではない何処かへ行きたいけれども、行けない。大雑把にいうと異界往来譚と言える作品で、異界へ行く話とする読み方があると思います。

日常を過ごす中で、「ここではない何処かへ」という気持ちは、少なからず皆さんが抱く感情ですよ。主人公はそのような気持ちを非常に強く抱えていると読めます。内容は全く異なりますが、スタジオジブリの、「千と千尋の神隠し」という作品のイメージを持っていただけると分かりやすいと思います。千尋という少女が異界に迷い込んで、名前を奪われて千という

名前になる。やがて元の世界に帰るという話です。「私」が山の中の家を初めて見に行く場面では、男に連れられて進んだ山道の入り口に地蔵があります。

「千と千尋の神隠し」でも地蔵のようなものが登場し、それを境界に異界と現実が分かれていきます。地蔵はあちらとこちらの世界の境界線に置かれる習慣が古くからありますし「草の巢」では地蔵を意識的に使っていて、何度も登場します。神社の側の地蔵が笑いかけているように見える等、普通の世界ではないかのように書かれています。また、「私」が夜の海に浮かぶ漁船の光を、対岸にある民家の光のように見えるという場面があります。漁船だと分かっているけれども、対岸にある民家に見える。これは何故でしょうか。主人公がいる世界が異界だとしたら、対岸にある民家の光のように見える世界は、元々自分が居た現実の世界ではないか、そんな書き方をしていると捉えることができます。

「私」が「ここではない何処かへ」という想いを抱く理由と

しては、彼女が引越しの多い家庭環境で育ったことが挙げられます。これは、男の家が主人公にとってなぜ異界であるのか、異質なものであるのかということに繋がります。引越しの多い家に育っているため、家具が少なく、最低限のものだけを残す習慣が主人公の家族にはありました。一回目の引越して必要なものだけを持っていく。そして次にはさらに厳選したものを持っていく、ということを繰り返し、どんどん荷物が少なくなりえます。

最終的に彼女は「(どんなところで暮らしても)どこも私にとって同じだった」と語ります。帰属する場所がなく、ここが私の暮らす場、生存の場だという気持ちと彼女を感じていません。そのため、自分自身の根拠となる部分を持ち得ていないと分析できます。

異界性の崩壊

男の家はゴミ等の不必要なものを集めて作られています。一方で「私」の家は、実用的で必

要最低限のもので構成されています。男の家は「私」の家の真逆ですね。それ故に、現実として自分自身が当たり前のことと考えてきた世界観とはかけ離れた男の家が、男も含めて「私」にとって異質なものと感じられるのではないかと思えます。

「私」は男に連れられて異界へ行ったと思うことで、自分の願望を遂げていますが、この後、この異界性は崩壊していきます。主人公の異界への憧れから、異界性が崩壊していくまでの過程がこの小説の中心を貫く筋であると言えます。「ここではない何処かへ」というものが、実際にその場に立つことで、やがて時間とともに普遍的なものに変って現実になり、これが異界性の崩壊に繋がっていきます。

また、作中では空き家等から男と一緒に家具を集めていく描写がありますが、そうするうちに、男は自分にとって全く異質なものと言う認識が、実はそうではないことが見えてきます。当初、「私」が、異質だと思っていた家も、だんだんと現実の家に見え始め、日常が追い付い

てくるようになります。

この物語の最後は再び男の家が舞台となり、卓袱台の前に座る男の横に「私」が並んで座る場面が書かれています。ここで、「私」は自分の家族と卓袱台を囲んでいるような意識を得てしまいましたが、それに気付き始めた主人公は、「ここ」から逃げようとしています。何故逃げるのでしょうか。それはおそらく、異界性の崩壊を受け入れられずいたからだと思います。そして、現実的な場となった男の家から逃げるのですが、ここで、また地蔵が登場します。男が自分を追いかけてきてくれるのではないかと、地蔵のあたりに目を凝らしながら待つ描写があり、自分が逃げたいのか、男を待ちたいのか分からないという表現をしています。これは、男が私たちの世界の異質なものであってもほしいという思いが、まだ心に残っていると読みとくことができます。

その後の「私」については何も書かれていません。余韻を残す形で、この作品は終わっています。

場所と人間

主人公は生の感覚が希薄な人間です。また帰属する場所の感覚も希薄で、どこに居ても同じ、根拠たる場を持たない、生存の場がない。ある意味では現代に生きる人間の象徴と考えることができます。しかし、男との時間を通して、日常生活は様々な細部が堆積し、地中深くで、複雑に絡まりあって匂いを発するような、濃密な根を形成しているものだと「私」は気づきます。日常の堆積の場が家であり、人間がそうした場に生かされていることに、ぼんやりとですが、主人公には感じられていることが描かれています。「私」は無駄なものと実用的なものを分けて考えてきたけれども、生存の場の形成には、実は無駄なものはないと気づいたことで自分自身の存在を肯定する、そんな可能性にも繋がっていくのではないかと思います。

この作品は、場所との関わりが希薄になった現代人の生の空虚さを表現し、場所と人間との関係を再考させる、場所をめぐる

る物語とも読めます。例えば、親の家に子どもが住み、さらに孫が住むなど、一つの場所に人間が二代、三代と深く関わっていき、場所の記憶がその場所に堆積していきます。それが人間を形成していく、大事な土台になっていくと思うのですが、時代背景もあり、今の私たちは濃密な土地との関係性が昔に比べると希薄になってきています。ある意味では、我々の生存感覚、自分自身を根拠づける場所のない、そのような空虚さに繋がっていると考えられます。角田さんはそれらのことも意識しながら、場所と人間の間接性を考察して、「草の巢」という不思議な作品を書いたのではないかと、私は考えています。

●上坪裕介氏 プロフィール

埼玉県所沢市出身。日本大学芸術学部専任講師として活躍。

「椿荘五号室」で第十八回日大文芸賞佳作受賞。「コンタクト」・「路地の灯」で第十四回・第十五回舟橋聖一顕彰青年文学賞佳作を受賞。

共著に『現代女性作家読本⑮ 角田光代』・『現代女性作家読本⑯ 宮部みゆき』など。

出張おはなし会



所沢図書館では、地域の高齢者施設等へのお出張おはなし会を実施しています。図書館職員が施設を訪問し、読み聞かせや手遊びなどを行います。今回は、出張おはなし会の様子をご紹介します！

◆プログラムの例◆

1. すばなし『鳥吞爺(とりのみじい)』
2. 図書館クイズ
3. 大型絵本『かわいそうなぞう』
4. すばなし『みょうが宿』
5. 手遊び『あんたがたどこさ』
6. 紙芝居『金色夜叉』
7. 詩の朗読(『草野心平詩集』より)
8. 手遊び『海』



【すばなし】

本などは一切見ずに、昔話を語ります。

【図書館クイズ】

図書館のことを知っていただくため、図書館に関するクイズを行っています。



【絵本】

絵本の読み聞かせも行います。この写真は大型絵本の読み聞かせの様子です。



【紙芝居】

紙芝居は、紙芝居舞台を使って行っています。



【手遊び】

椅子に座ったままできる、簡単な手遊びも行っています。毎回たくさんの方が笑顔で参加して下さいます。



【朗読】

心に響く作品の朗読も行っています。絵本や紙芝居とは少し違った雰囲気を楽しんでいただいています。

出張おはなし会の様子をご紹介します。

所沢図書館では、図書館の利用促進や地域貢献につながる活動を、今後も積極的に行ってまいります！





パスファインダーって何ですか？



さんとく～知っ得！読ん得？調べ得！～

パスファインダー (Pathfinder) とは、path (小道) +finder (発見者) の複合語で、道案内・誘導者のことをいいます。図書館では、あるテーマに関する資料や情報を探すための手順をまとめたものを「パスファインダー」と呼んでいます。いわば調べ方の「道しるべ」です。ここでは所沢図書館で発行している 10 種類のパスファインダー「さんとく～知っ得！読ん得？調べ得！～」をご紹介します。パスファインダーは市内各図書館で配布しておりますので、是非お手に取ってごらんください。所沢図書館ホームページにも掲載されています。

No.1 日本茶を調べる！

日本三大銘茶のひとつ“狭山茶”や、おいしいお茶の淹れ方、お茶の効能など

No.2 所沢を走る鉄道

所沢の交通の要である西武鉄道の歴史や現在の車両、かつて市内にあった車両工場など

No.3 川を調べる！

川の現状や特徴、防災・治水、環境問題、郷土の川や川の楽しみ方など

No.4 相続について調べる！

相続税や贈与、財産分与、遺言、終活など



No.5 所沢飛行場を調べる！

航空発祥の地としての所沢、陸軍航空学校、基地返還運動など



No.6 郷土の祭りを調べる！

所沢の祭りや埼玉の祭り、所沢音頭や所沢市民音頭など

No.7 日本の昔話・伝承を調べる！

日本の昔話・伝承や所沢の昔話・伝承、埼玉の昔話・伝承など

No.8 はじめて学ぶ法律

法律の調べ方、身近な法律問題、判例、法律用語など

No.9 文化遺産を調べる！

郷土の文化遺産、日本の文化遺産、世界の文化遺産など

No.10 鎌倉街道を調べる！

鎌倉街道の歴史や歩き方、市内の鎌倉街道など



今回、初めて私も記事を書きました。みなさんに読んでいただくことを想像すると、どきどきします。図書館で働き始めてからもうすぐ一年。たくさんの方に助けられながら過ごしてきました。自分もいつか誰かを支え、誰かの役に立つことができるような人間になりたいと願う毎日です。(N)

編集後記

編集発行：所沢市立所沢図書館

〒359-0042 所沢市並木 1-13

ホームページアドレス パソコン <https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp>

携帯電話 <https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp/k>

スマートフォン <https://lib.city.tokorozawa.saitama.jp/opw/OPS/OPSINDEX.CSP>

電話 / FAX

本館 04-2995-6311 / 04-2992-1421

富岡分館 04-2943-3636 / 04-2943-6680

所沢分館 04-2923-1243 / 04-2928-8195

吾妻分館 04-2924-0249 / 04-2928-8250

椿峰分館 04-2924-8041 / 04-2928-8148

柳瀬分館 04-2944-4023 / 04-2945-7236

狭山ヶ丘分館 04-2949-1193 / 04-2949-8577

新所沢分館 04-2929-1905 / 04-2929-1906

松井小学校図書館 04-2992-2796 / 04-2992-2797

2017年1月31日発行 復刊いずみ14号 (通巻92号)